

リスナー

放射朗

「……。それでさ、彼っいたら今日は金無いから割り勘にしようだって。金無いんだったらフランス料理なんか食べに連れてくなくて言うのよ」

「あきれたー。あたしは今までデートで財布出した事無いわよ。あたりまえじゃん。男が出すのって。あんた、そんな男止めたほうがいいよ、今そんな調子なら、結婚したら鼻も引っ掛けられなくなるわよ」

「冗談じゃないわよ。結婚なんて。遊びに決まってるじゃない。あんなのと結婚する気なんて全くないって……」

机の端に置いてあるユピテルのマルチバンドレシーバーが、女性の声でくだらない会話をつぶやいている。その声に夜食のカップめんをすすする音が重なった。

コードレス電話の電波を受信しているのだ。

アルバイトから帰って、寝るまでのひとときの時間、こつこつと見ず知らずの人の会話を聞くのが僕の数少ない趣味の一つだ。

盗聴ではない。盗聴というのは、部屋や電話線に盗聴器を仕掛けたりして個人のプライバシーを盗む事であり、犯罪である。

僕がやってるのはあくまで受信。

身の回りを傍若無人に飛んでいる電波を捕まえて聞いているだけだ。受信されたくない人はスクランブルもかけないコードレス電話なんて使わなければいいのだ。

スクランブルをかける、というのは受信されても意味不明な雑音にしかならないように処理することを言う。

でも、実際は受信する側でスクランブル解除する事はそれほど難しい事じゃない。

結局、デジタルでもない限り、コードレス電話を使う以上傍受されるのは覚悟しなければならぬことなのだ。

受信機の周波数調整つまみを回していくと、さまざまな人の本当の生活が、少しだけ垣間見える。

テレビや映画などの作り物ではない本物のドラマが、砕けたガラスのように散らばりきらめいている。

テレビや映画が偽者の金の延べ棒だとすると、僕

が受信しているのは本物の砂金の粒というところだろうか。

カップめんのスープまで吸い終わると容器を流しに投げ捨てた。

容器はかすかに汁を飛ばしながら流しの中に吸い込まれていった。

ワンルームの良いところだ。何でもが自分の手の届く範囲にある。

聞き飽きたので、つまみを回す。

液晶デジタルの緑色の数字がパラパラめくれ始め、しばらくしたところで、ぴたりと止まった。

「昨日はありがとうね。嬉しかった。でも少し激しすぎだよ。足が痛くなっちゃった。それに焦ってホテルのポールに車擦ったでしょ大丈夫だった？」
「んー悪い悪い。久しぶりに会えたから興奮しすぎたかな。でも車なんて気にするなって、ちょうど今乗ってるのがモデルチェンジして新型のCクラスが出たから乗り換えようかと思ってたんだ。でも、本当に、クミコには悪いと思ってるんだよ。んークミコに彼氏できたら言えよな。俺はクミコの幸せのために身を引くからさ」

聞き覚えのある声が流れてくる。

近くに住む女子大生の、クミコさんのコードレス電話機だ。

この時間に二人の会話が聞こえるという事は、男の方の奥さんは夜勤ということになる。彼の奥さんは看護婦なのだ。

クミコさんと不倫相手の会話がねちねちと続いている。

「ううん。今のところ彼氏なんか要らないよ。かー君と一緒にいれるだけでいいの」

彼女は甘える声でそう言っているが、僕は知っている。

彼女の仕掛けた時限爆弾が、もうしばらくしたら爆発するであろうという事を。クミコさんと友人との昨夜の会話を僕は聞いたのだ。その会話の中で、クミコさんはこう言っていた。

「彼、医者なんだけどさ。やっぱり世間知らずなんだよね。高収入で世間知らずの男がやっぱり一番いいよ。こっちで操縦できるもの。別れさせるのは難しいくないのよ。今なら大喧嘩になれば、別れて私の方に来る確率高いからね。こないだ車のシートにピアス挟めといたんだ。まだ奥さん気付かないみたいだけど、時間の問題よね」

彼は知らないうちに彼女の陰謀にはまっている。でも可哀想なのは、彼でもなく彼の妻でもない。

彼らの子供。

まだ五ヶ月という事だった。

別れる事になつたら、生まれて間もない赤ちゃんはどうなるんだろう。

多分奥さんの方に引き取られるのだろうが、男が育てると言い出すかもしれない。

「子供？ 赤ちゃんがいるけど、奥さんの方に引き取らせるわよ。他人の生んだ子供育てる趣味無いもん。でも、彼責任感強いからなあ。自分が引き取るなんて言いかねないんだよね。そこだね問題は。まあそくなつたら、適当にやっつけていくだけだけだね」
彼女のそんな言葉が耳に残っている。

すべては彼の奥さんが車のシートに挟まれたピアスに気付くかどうかにかかっているわけだ。

だからといって彼に陰謀を知らせるつもりは僕には全く無い。所詮僕は傍観者。

リスナーではないんだから。

レシーバーとファンヒーターのスイッチを切り、万年床にもぐりこむ。

明日は10時からバーガーショップのバイトだ。あのいやみな店長の蔑視をまた全身に浴びるかと思つと、ちよつと鬱な気分になつてしまった。

端の黒くなつた蛍光灯を消して暗闇に目が慣れると、布団の横にある目覚し時計の針がちょうど午前1時を指してるのが見えた。

数人の不良達が彼を取り囲んでいた。

全裸になることを彼は強制されている。

嫌がる彼に不良達は殴りかかる。彼は腹を抱えて苦しそうに床に転がる。

彼の顔は鼻血で血まみれだ。

放課後の学校の廊下。

僕は恐ろしくて逃げることも、不良達を止めることも出来ないでいる。

彼はとうとう不良達の言うことを聞くと言答する。

彼は泣きながら血に染まつた顔をゆがめ、制服を脱いでいく。

全裸になつた彼の白い身体。

前を隠すな！と叫ぶ声がある。

彼は両手を頭の上にあげさせられる。

陰毛の豊かに生えた彼の股間があらわになる。恐怖であれは縮み上がっている。

不良の一人がライターに火をつけて、彼の股間に近づける。

泣き叫ぶ彼。声が響く。僕の鼓膜を破らんばかりに……。

僕は飛び出してやめさせたいが、足は地面に張り付いたように動かない。

彼の股間から煙が上がり、毛の焼ける嫌なにおいが周囲に漂ってくる。

僕も泣き叫ぶ。彼を許してやってくれと。

不良が一人ゆっくりと僕の方に近づいてくる。

じゃあおまえが身代わりになるかと不良は僕に訊く。

僕は思い切り首を振る。それは出来ない。ではおまえも同罪だと不良は言う。僕も同罪だと。

声で目がさめた。

その声は自分のうなされる声だった。

またあの夢だ。中学の時の夢だ。僕は傍観者でしかないと確認する夢。

勇気のない卑怯者だと糾弾する夢。

一生リスナーでしかないと断罪する夢だ。

「駄目だなあキミ、もう入って2ヶ月だろ。いいかげん覚えるよ。手首を使ってこっただよ」

縦に6個ずつ、2列に並んだハンバーガーの肉を、店長は鮮やかな手つきでひっ

くり返して見せた。すでに中年の域に両足突っ込んでいる彼の腹はややたるみ、制

服のベルトの上に覆い被さっている。丸顔の額にはいつも汗をかいていて、うっとう

ましいことおびただし。

バーガーショップのカウンター裏の調理場では、

安い肉の焼ける匂いが、換気扇を回しても追いつかずに充満していた。

僕みたいなバイトに対して、店長の態度はいつも高圧的で蔑視を含んでいた。

自分の一存でいつでもクビに出来る相手をいたぶり、さげすみ、苦痛を加えること

とを唯一の趣味にでもしているみたいに思えた。

「ほら、やってみろよ」

彼が僕の頭を軽くこずいた。

彼の真似をして、へらで手早く肉を裏返す。いくつかの肉が崩れてちぎれてしまう。

「やっぱ、キミには掃除くらいしかやらされないかなあ。こんな不器用な人間も珍しいわ」

彼にとつては僕の失敗は嬉しいことなのだ。その顔には喜びの表情が隠しようもなくあふれていた。

「へいチーフ、杉田に掃除やらせてくれ。俺は指導に疲れたので休憩するよ」

高校生のバイトに声をかけると、店長は腹をゆするようにして狭い通路を抜けて店長室に入っていた。

その場に居た高校生のバイトの中で最も背の高い湯川が、店長が居ないときはここを仕切るチーフだ。

髪の毛は茶色に脱色してあり青いチーフキャップからはみ出したのが角みたに見える。

「杉田さん、そういうわけだからちりとりとほつき持ってきてください。そんでこの辺お願いしますよ」

肉を焼く係りに入った湯川が足先で自分の足元を示した。

4歳以上も年下の男にそんな指示をされるのは悔しかったが、言われるままちりとりとほつきを口ツカーから取ってきた。

パン焼き係りの小川と原田が、情けねーよなと声も潜めず言い合っていた。

「何処にごみがあるんだよ」

湯川の足元は見たところ大して汚れていない。ほらここ、こことつま先を僕の前に突き出す。

うつむいて良く見ようと腰をかがめたとき、後ろから誰かが僕の尻を突き飛ばした。バランスを崩してパンの並べられた籠に顔から突っ込んだ。

笑い声起きる。

怒りに任せて振り向いてつかみかかろうとしたとき、店長が入ってきた。

「おう、どうしたんだ。何か合ったのか」

何が合ったのかはお見通しのはずだ。年下の高校生に対する怒りは、笑顔の店長に移る。

僕は特別不器用というわけではない。

頭も、良くはないが悪くもない。普通のことば普通に出来るつもりだ。

僕はこの2ヶ月の間に両手で数え切れなくらいあり、さらに再びあがってきた

暴力的な衝動を何とかこらえて、すいませんと小声で謝った。

暴力的な衝動といったって、今まで人を殴った事なんて一度も無い。そうしたいくらい腹が立っても実行する勇気なんて僕には無いのだ。

「高田店長ってちょっといやみですよ。杉田さんも大変ですね」

店長が休憩に行って席をはずすと、川村真由美が寄ってきて小声でそう言った。

彼女の存在は僕が此処をやめない大きな理由の一つだった。とりだてて美人ではないが、笑顔と性格がとてまあ美しく見えた。

この娘も家ではくだらない電話の長話をやってるんだろうか。多分やってるんだろうな。

バイトの終わる時間が重なったので、僕は川村真由美と二人で駅方向へ向かった。

バーガーショップのある繁華街から新潟駅まで歩いて約三十分。

女性と二人で歩くなんて滅多にないことだし、川村真由美とゆっくり話をするのも初めてだった。

「杉田さんは大学生でしたっけ」

信濃川の河口近くにある万代橋を渡る途中で、彼女が聞いてきた。

雪は降っていないが、歩道が凍結していて歩きにくい。凍結した路面は街灯を反射してきらきら光っていた。

何とか面白い話をしたかったけど、そんな才能は僕には皆無だ。

「大学は卒業したけど、就職浪人のフリーター。川村さんは？」

「南高校の3年です」

「そんなところだろうと思っていた。」

「南高ってバイト許可してるの？」

「もちろん内緒ですよ。でも、もうすぐ卒業だし、春から看護学校に行くんで、すこしでもその資金増やしたいなって思つて。一人暮らしもしたいし」

「へえ。看護学校に行くのか、じゃあ新潟大学の医短？」

「もちろん。わざわざ県外に行く必要もないですもんね」

「なるほど。九州から新潟大学まできて、卒業しても定職につかずにふら付いてる人間と比べて、地に足がついてるって感じだね」

「なるべく嫌味にならないように僕は明るくそう言った。」

話を続けようと質問ばかりになってしまつても、それも尽きて話す事がなくなつてしまつてしまつた。

信濃川にかかる橋の中で、万代橋は最も長いといふわけではない。

それでも普通に歩いて渡り切るのに五分はかかる。

こんな凍結路じゃあその二倍は優にかかる。ふきつさらしの橋の上だ。気温が急に三度くらい下がつたように感じる。

僕はダウンジャケットだから冷たい風が吹いても、それほど寒いわけじゃなかったが、彼女はコートとの隙間から体温を奪われて凍えそうにしていた。ダウンジャケットを脱いで彼女に着せてあげた。そう思うが、とても僕にはそんなことは出来なかった。

「やっぱりバスにすればよかったね」

彼女は黙つてうなずいた。

そして一つため息をついて言いかけた。

「実は、ちょっと……」

ちょうど車のクラクションが聞こえて、彼女の声にかぶさつた。

「え、どうしたの？」

僕は彼女の方に少し耳を傾けて聞いた。

「いえ、なんでもありません」

彼女はまた一つため息をついて、残りの道のりを黙々と歩いた。

駅前の銀行の電光掲示板は、現在の気温マイナス三度と表示していた。

「ひどいじゃないか。クミコ。わざとあんな事したんだろ」

受信機のスピーカーから不倫男のヒステリックな声が、少しノイズ交じりに聞こえている。とうとう奥さんに助手席に挟んであったピアスを見つけられたんだろ。

「わざとじゃないわよ。そんな事するわけないじゃない」

「まいったなあ。嫁さん怒りまくって実家に帰っちゃったよ」

「いつそのこと別れちゃいなよ。あたしとやり直そうよ。いつもそうしたいって言うてたじゃない」

クミコさんの甘える声。

でも不倫男の声はいつものようにその声に合わせない。

「馬鹿言うなよ。そんなことできるわけ無いだろ。できるわけ無いからしたいって思うんじゃないか。そんな事もわからないのか」

「何よ！じゃあ私を愛してるっていつのは嘘だったの？」

お決まりのパターンだ。クミコさんの考えは甘かった。

大喧嘩になれば、奥さんと別れて自分の方に来るなんて、ちよつと自惚れが過ぎたみたいだ。男もヒステリックだったけど、それが伝染したのか今度はクミコさんがキレ始めた。

「冗談じゃないわよ。散々あたしを抱いておいて、奥さんにばれたらはいサヨナラなわけ？」

「仕方ないだろ。子供だっているんだし」

「子供なんか奥さんになればいいじゃない」

延々と続く絶叫のせりふに嫌気がさし、僕は周波数つまみを回した。

数字がパラパラ変わり、また別の世界が僕の前に現れる。

次の日は久しぶりの休日だった。

受信機がまだぶつぶつ呟いている。

どうやら電源を切らずに眠ってしまったらしい。

午前9時の朝食は休みの日の僕としては早い方だった。

何気なくテレビのスイッチを入れて、流れるニュースを目で追っていた。

一瞬間き覚えのある地名にはっとして目を凝らす。

新潟南港で水死体で発見された小和田久美子さ

んは、死亡推定時刻が昨夜の午前2時前後と見られており、事件と事故の両面で捜査されています』
テレビの画面が万代橋から見た信濃川河口に変わった。

新潟南港で発見されたのなら、あの万代橋から落ちたのかもしれない。

凍結路で足を滑らせて。

でも橋の欄干も低くはないし、そう簡単には乗り越えられないか……。

久美子？そう言えば昨夜のクミコさんと不倫男の口論は激しかったな。

あの後どうなったんだろう。

もしかして、クミコさんと小和田久美子が同一人物だったりして……。

となると一番怪しいのはあの不倫男という事になる。でも、そんな偶然は簡単に起こるものではない。僕は深く考えるのは止めて、近所の本屋に暇つぶしに出かけた。

ヘッドホンをつけて歩く僕を、道行く人は音楽でも聞いているんだと思うだろう。

でも、僕の耳に聞こえるのは他人の会話。

最近の受信機は数年前のものとは比べても小型化が進んでいて、胸ポケットに入れていても大して邪魔にならないのだ。

カップヌードルの空き容器が転がる六畳一間の部屋を出る時からしばらくクミコさんの電話機の周波数に合わせていたが、いくら待っても何も聞こえてこなかった。

だからといって彼女が小和田久美子とは限らないのは当然だ。

そんなにいつも電話かけてるわけではないからだ。ただ、聞こえてくれば、彼女が小和田久美子じゃなかったということがはつきりするだけだ。混雑した本屋で、いつも買うラジオライフの今月号を買って帰った。

夜のニュースで小和田久美子は僕の近所に住んでいる女子大生だった事が分かった。ますますクミコさんが大和田久美子である可能性が高くなる。そしてその夜、何度も彼女の周波数に合わせたが、とうとう一度もヒットする事はなかった。

日本の警察は馬鹿じゃない。痴情のもつれの殺人なんてありふれた事件は簡単に解決してしまうだろう。

僕が心配する事は何も無い。僕はただの傍観者なのだ。勇気のない傍観者。

だけど、不思議な事に再びバーガーショップのバイトに行く三日後になっても事件が解決したというニュースは流れなかった。

その日のバイトは四時から入って九時までだった。

今日も幸運なことに、気になってる川村真由美と同じ時間帯だった。

相変わらず高田店長のいやみな物言いや、生意気な高校生には腹が立ったが、そんな事より僕にとっては例の事件のほうが気になっていた。

もしクミコさんがあの不倫相手に殺されていたとしたら、僕は黙って見過ごしにしているものだろうか。

でも、警察に通報するといっても、簡単じゃない。電話一本ですむような問題じゃないだろう。

その情報が本当かどうかしっかり調べるのが警察の仕事なのだから。

事情聴取なんかされて、いろいろ根掘り葉掘り聞かれるのだろう。

大体どうしてこんな物持ってるんだ？

盗聴が趣味なのか？ 変態じゃないのか？ 悪用してたんじゃないだろうな？

大和田久美子のストーカーやってたんじゃない

のか？

犯人はおまえじゃないのか？ 人に罪を着せようとしてんじやないのか？

向こうは医者でおまえはフリーターだもんな、どっちを信用するかだな。

警察の質問や偏見に満ちた声が僕の耳の中に渦を巻くように浮かんでくる。

肉を裏返したり、ポテトを揚げたりの単調な作業の間、僕はそれらの事をずっと考えていた。

前回事業、終わりの時間が川村真由美と合わさった。意を決してまた一緒に帰ろうと誘ってみたが、彼女はつれなかった。

「ちょっと用事があるから」

そう言う彼女は何か訴えかけるような目つきだった。凍える彼女にダウンジャケットを貸してやる事も出来ないいくじ無しの男には付き合いきれないという事だ。

ため息をつきながら、一人で僕は雪の舞う万代橋を渡った。

正面に見える万代シティのネオンが赤や黄色の光を放射して、いかにも明るい雰囲気をもし出しているが、僕の心の中はうっとおしい灰色の雲が占拠している。

周囲が賑わうほどに自分の中の暗がり気になつてくる。

ちよつと橋を渡り終えたあたりで、忘れ物をしたのを思い出した。

最後に手を洗う時に時計を外してそのまま置き忘れてきたのだ。

高価な物じゃないが、誰かに持っていかれるのは困る。

明日の朝には多分無くなつていようだろう。

凍りついた万代橋を引き返すのは気が重いが仕方ない。

僕のバイトしているバーガーショップは午後9時閉店で十時までは掃除の時間だ。居残りのバイトが数人で後片付けをしてる所だろう。もう掃除は終わったんだらうか。着いてみると店の方の明かりはすでに消されていた。

店の裏手の事務所に回る。明日の朝出すためのゴミ袋が積まれていて歩きにくい狭い通路を進み、ドアを開けた。誰もいない。

手洗い場に行つて置き忘れた時計を探す。

見当たらないので、もう誰かが持つていったかなと思つていたら、足元に転がつていた。拾い上げて、来た道を引き返す。

再び冷たい空気の中に出ようとしたら、後ろで声が聞こえた。

「もう許してください」

川村真由美の声みたくだった。

泣きそうな声が、小さく聞こえた。

奥の店長室の方からだ。

強盗でも入ったのか？

僕は足音を立てないようにして店長室のドアに近づいた。

中からは川村真由美のすすり泣く声が聞こえてくる。

踏み込むかどうか迷つた。中で何が起こつてるのだらうか。少しずつドアを開けて覗き見る。

僕の目に飛び込んだきたのは、下半身裸で机に突っ伏している川村真由美の白く丸いお尻だった。そして側でニヤついていいる高田店長だった。

思わず声をあげてしまった。中の二人に気づかれる。

思い切つてドアを開けて中に踏み込んだ。

「何をしてるんですか。川村さんをはなしなさい」

興奮していたせいか、普段と打つて変わつて強く出てしまった。

「なんだ。杉田か、忘れ物でも取りに来たのならさつさと帰るんだね。二人でお楽しみ中なんだから。」

野暮な真似は止めるよな」

彼はそう言っつて川村真由美の滑らかなお尻をペチペチ叩いた。

僕に見つかつた事に動じる様子も無い。

「ああ。見ないでください」

川村真由美はいいやいやと首を振るが、手足を縛られていて身動きが取れないのだった。

「俺達はこつやつて楽しんでるんだよ。この娘はこんな風にされるのが大好きなんだ。俺が無理強いしてるわけじゃないんだぞ。そうだな」

彼の手は真由美の股間に入つて動いていた。

真由美は喘ぎながら言つた。

「そ、そうです。店長の言つとおりです」

僕はそこできびすを返すと、来た道を走つて帰つた。

寒さも全く感じずに部屋までの道のりを滑つて転んだりしながらも40分間走り続けた。部屋についたときには一張羅のジャケツトは泥まみれだった。

あの娘が店長と何しようつと、僕の関知する事じゃない。

関係ないことだ。

彼女の真つ赤な肉の割れ目に滑り込みうごめいている店長の指先……。

その夜、真由美の白いお尻の映像がずっと夜中まで僕の脳裏を占領して、とても寝付かせてくれな

った。

彼女の事はずっと、ちょっと気になる女の子くらいに思つていた。

いや、そう思おつと努力していた。

どうせ好きになつても僕に振り向いてくれるわけが無い。

好きになつても意味が無い。だから好きにならな

いようになつと我慢していたのだ。今までずっとそうだったし、これからもそうに

違くない。

誰も僕を愛さない。だから僕も誰かを愛しても仕方が無いんだ。

でもあんな事があつて、彼女の事を本当に好きなんだと僕は気付いた。

その彼女がああ嫌な店長と、あんな行為をしているなんて。

バーガーショップのバイトは辞めることにしよう。

とりあえず今月分が終わつたら……。

次の日もそこでバイトだった。サボりたいのは山々だったが、生活費をこれ以上切り詰めるのは不可能だ。少しでも稼いでおかないと……。

1時間ずれて、川村真由美がカウンターに入ってきた。

僕も彼女も目を合わせない。なるべく顔も見ないようにしていた。

「ありがとうございます。コーヒーはホットにしま
「ありがとうございます。コーヒーはホットにしま
すか？」

真由美の声は相変わらず明るかった。

この店のピンクの制服も相変わらず似合ってる。
あんな事を店長としているのに。

それを僕に見つかつたのに、平気なのだろうか。
僕の事をなんとも思つてない証拠だ。

自分の生活に影響を及ぼす存在じゃなくて、ほん
の少し生活する時間と空間が重なるだけの赤の他
人。

僕は彼女にとつて、その程度の人間なのだろう。
安物の肉を焼いていると、誰かが側に立った。

また店長か。いやみを言つてストレス解消に来た
んだろう。

そつちを見ないように、肉を焼く事に集中する。
そいつが僕のズボンのポケットに何か押し込ん
だ。

ちらりと見ると、側に立ってるのは店長ではなく
て川村真由美だった。

「私のこと変態女だつて思ったでしょうね」
午後9時だ。

バイトの終わった真由美は、まだ制服のままメモ
に書いてあつた場所、バーガーショップの裏の書店
に現れて言つた。

急いで来たのだろう。額に少し汗をかいていた。
僕は1時間早く上がつて此処で時間を潰してい

た。この書店の閉店時間も近くなつてきたので近く
に客は誰も居ない。

「君たちがどんな趣味で、何をしようが僕には関係
ないよ」

立ち読みしていた雑誌をもとの場所に戻す。

「私が好きであんな事してると思つてるんですか」
彼女は悔しそうに唇をかんだ。

「そんな事……」

知るもんかといいたかつたけど、彼女の表情を見
ると言えなかつた。

「実は、私、脅されてるんです。元々は私が悪いん
ですけど」

彼女の目に溜まつた涙は今にも落ちそうだった。
「私……。前にあそこのバイトでレジのお金盗んだ
んです。どうしてもその時必要で、次の日が給料日
だったからその時返せばいいと思つて。それを店長

に見つかつて……。警察に言つたらおまえは退学だ。
そうなつたら、看護学校の入学も取り消しだって、

言われて……。でも、これ以上言いなりになるのは嫌だから……」

「なぜ僕にそんな事を……」

僕にどうして欲しいんだろ。助けて欲しいのか？そんな事思っても無駄というものだ。

「杉田さんには本当の事知っておいて欲しかったから……私、やっぱり警察に行くことにします。高校退学になって、看護学校にいけなくなっても、自業自得ですもんね」

彼女はそう言つと、一度ぺこりとお辞儀して僕の前を去ろうとした。

「ちよつと待つて、どこへいくの」

咄嗟に出た僕の言葉に彼女は答えた。

「今日も店長に呼ばれているんです。でもそこで警察にいくつて言うつもり」

僕の顔も見ずに彼女はそう言つて駆け出した。

僕はどうすればいいだろう。彼女は警察に行くと決心してるみたいだから、僕には何もすべき事は無い。

ただの傍観者なんだ、僕は。

これまでも、これからもずっと。勇気のない傍観者。他人の生活を聞くしか出来ないただのリスナーだ。ちよつと目の前にあったその本を、僕は柵から取り出した。

ドアの内側からは二人の口論する声が聞こえていた。

店長と川村真由美の声だ。

僕は思い切って店長室のドアを開ける。

二人が僕の方を向いた。

書店で彼女と別れてからまだ10分しかたつてない。

「またおまえか。今度は何だ」

興奮した高田店長が吐き捨てるように言った。少なくなつた前髪が汗に濡れて額に張り付いていた。

「話は川村さんから聞きました」

がくがくする膝を必死にふんばつて平静を装う。

「こんなやつに話してなんになるつてんだよ。頼るやつ間違えてるぜ。わかつてるのか？おまえは退学になって看護学校にもいけなくなるんだぞ」

店長は僕を無視して真由美に言った。つばが飛んでるのが光つて見えた。

「川村さんは退学になって、合格も取り消されるかもしれないませんが、店長は自分がどうなるかわかっていますか？」

彼はやつと僕のほうを向いた。

「昨日は縛つてましたから刑法220条逮捕及び監禁にあたりますよ。条文はこうです。不法に人を逮捕し、または監禁した者は三月以上五年以下の懲

役。それに加えて、恐喝と強制わいせつも加われれば、執行猶予はつきませんよ、普通。僕は司法試験のために勉強しているからわかるんです。もちろん川村さんが合意の上と納得してるなら、そうはなりませんけど」

一息にそれだけ僕が言うのと、店長の顔色が変わり目がぎよるきよるさまよいだした。

「馬鹿な。あれは合意の上だった」

店長の声に、真由美が大きく首を振った。

「痴漢の裁判なんかを見てれば良くわかるんですけど、男の言い分はまず認められません。女性の言い分でほとんどが決まってしまうですよ」

その言葉でがつくり来た店長は、次の僕の提案を無条件でのんだ。

つまり、すんだ事は仕方が無いから、今までの事は彼女の着服も店長のセクハラも無かった事にしてしまうという案だ。

ずいぶんあつけない解決だった気もするが、所詮立場の弱い相手にしか強く出れない男だったのだ、店長は。

今まで、さんざん嫌がらせをしてきたのも、弱い人間の強がりだったのかもしれない。そう思うとなんだか哀れに思えてきた。

「良かった。おかげで退学にならずにすんだ」

万代橋を渡る途中、真由美は嬉しそうだった。

街灯の明かりで彼女の素直な笑顔が映し出されている。目がきらきらしている。

雪は降っていない。

今日は割と気温が上がったので、路面の氷が少し溶けて、水っぽかった。

「結局、僕が行かなくても、君が警察にいくって言えば、店長は折れてたんじゃないかな」

それほど自分が役に立ったとは思えない。

「そんな事無いよ。杉田さんが入ってくる前、あいっなんて言ってたと思う？そんな事出来ないように、これを持ってきたって。カメラとビデオ見せられたんだよ。恥ずかしい所をたくさん撮って、それをばら撒くって脅されて……。それにいうこと聞かないと、知り合いの暴力団からもらったシャブでシヤブ中にしてやるなんても言ってた」

「暴力団はハツタリだよ。多分」

まだ緊張が残ってるのか、膝ががくがくして歩にくかった。

「でも嬉しかった。あいつから解放された事もだけど、杉田さんが助けに来てくれた事が。杉田さん司法試験の勉強してたんだ。すごいね」

「それもハツタリさ。口からでまかせ。さっきの書店で法律の本ちよっと立ち読みしてきただけ。後はテレビドラマの真似だ。自分じゃとても出来ないからテレビドラマの役者になったつもりで、演じただけさ」

そつだ。僕はドラマを演じたただけだ。ヒーローの役を、卑怯者が……。

「演技だつていいじゃない。好きなように自分を演じられるんなら、それが自分つてことじゃないのかな。杉田さん、もつと自信持つていいはずだよ」
僕は返す言葉に詰まつて、ただにっこり笑つただつた。

彼女の言うとおりならどんなにいいだろう。
真由美は僕の腕に擦り寄り、肩にもたれかかつてきた。

今まで女性と付き合つた事も無いし、こんな状況にも慣れてない僕は心臓がやたら早く動いて、寒いのに汗までかいてきた。

何かが変わつている。

僕が変わつたのか、それとも周囲が変わつたのか。本当に変わるのだろうか。

傍観者以外に僕はなれるのだろうか……。リスナ―以外に……。

ちようど橋を渡り終えるちよつとした段差のところ、真由美が足を滑らせた。

支えようと手を出したが、引つ張られて自分も倒れてしまった。

右の足首をひねつた。

せつかく感じ良くこれまで来ていたのに、最後は

こうなるのか。
まあいい。捻挫くらいどうつてことないさ。

小和田久美子の事件はまだ解決する兆しも見えない。

彼女が付き合つていた相手が怪しいとテレビでは言つていた。

周囲の人たちの証言で、不倫していた可能性があるらしいが、その付き合つていた相手が特定できないという事だつた。

それらを合わせてみると、やっぱり小和田久美子はクミコさんなのかも知れない。

あれから何度も彼女の周波数に合わせるけど、一度もヒットしない。

同じ周波数で弱い電波を受信したりする事はあるが、急に電波が弱くなるわけが無いから、それは彼女の電話から出た電波じゃない。

同じメーカーの電話を使つてる別人だ。
何とかしてクミコさんと小和田久美子が同一人物だとわかればいいんだけど。

次の日、捻挫した足は腫れ上がつて歩くのも苦痛になつてしまった。

病院には行きたくなかつたが、湿布薬でももらつて貼つたほうがよさそつだ。

今日の予定のバイトはキャンセルの電話を入れ

て、朝から近くの病院に行く事にした。診察を終え、薬をもらつた。

その病院の薬剤部で湿布薬を受け取つてると、奥の方から何だか聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「んーこの薬なんだけど、指示してたのと違つんだよね。確かセデスは入れてなかったはずだけど……」

医者薬剤師にクレームつけているところみたいだ。

田村正和の台詞のように最初に「んー」がつく言い返し、それにこの声。

どこで聞いたんだろう。医者には知り合いなんかいないけど……。

その時、クミコさんの声がよみがえる。

彼は医者なんだけど、世間知らずで……。そんな話をしていた。

不倫相手は医者だつたんだ。愕然としている僕の前を、薬局から出てきたその医者はちらりと横目でこつちを見ながら通り過ぎていった。

彼の青白い顔は少しやつれて見えているみたいにも見えた。

そして写真付きの名札には、川端弘明と書かれていた。

川端弘明、かー君だ。それと、もうひとつあった。

僕は病院を出ると、職員員の駐車場の方に回った。車がたくさん並んでいるが、ベンツは一台しかなかった。

メルセデスベンツCクラス、不倫男は新しいCクラスが出たから買い換えたいって言っていた。

そこにとまっていたのは思ったとおり、一つ前のタイプのCクラスだ。

さりげなく後部のバンパーを観察すると、まだ新しいかすり傷がついていた。

ジクソーパズルのピースは怖いくらいにぴったりはまっついていく。

彼がクミコさんの不倫相手に間違いないだろう。そしてクミコさんが小和田久美子なら決まりだ。

「ちょっとこれ聞いてみて」

真由美の耳に、僕のヘッドホンを当ててやる。

真由美は最初きょとんとした顔をしていただけ、すぐにはつとまった。

「これ、携帯電話の声？」

「そう。この受信機ではコードレス電話やタクシー無線、警察無線なんかが聞けるんだ」

レシーバーのスイッチを切って、僕は答える。そしてこれまでの事を話して聞かせてやった。

万代橋近くの公園のベンチに座る僕達の前を、家族連れの買い物客が時々通り過ぎる。

昨夜最後のピースがはまり、ジクソーパズルは完成した。

クミコさんの周波数に合わせた受信機から、彼女の電話から出た電波を受信できたのだ。最初、声が違ってたから、別の家が同じ機種の手話を買って設置したのかと思った。しばらく聞いて、スイッチを切るうとした時、その声は言った。

「大体片付いた。でも、クミコの不倫相手ってまだわかんないのかしら」

若い女性の声だ。

「その部屋警察が来て全部調べたんだろ、写真の一枚も無かったのかしらね」

こちらは少し年配の女性の声。

「写真なんて無かったんでしょね。その辺は律儀な娘だったから……」

最後のほうで声が震えて途切れた。

「でも、本当にただの事故だったんじゃないのかねえ。殺人事件なんてねえ」

「警察の話は聞いたでしょ。あの夜橋の近くでクミコと誰かが口論していたって。その通行人が行き過ぎた後にきつと突き落とされたのよ」

若い方の声はクミコさんの姉で、もう一人は母親のようだ。

彼女の部屋を姉のほうに片付けに来てる様子だった。

「どうして私に教えるんですか」

真由美が聞いた。

「君も僕に打ち明けてくれただろ。だからかな。本当は君には一番言いたくなかった。せつかく生まれ初めて彼女が出来そうなのに、変態って嫌われるようなこと言いたい筈無いだろ」

真由美は何も言わずに聞いていた。

風が少し吹いて彼女の前髪をあおっていた。

「今から映画に行く約束だったけど、その前に警察に行く事にしたよ。君が決心したように、僕も決心した。君が大事な夢を失う覚悟をしたように、僕も一番大事な人を失う覚悟を決めたんだ」

しばしの沈黙。

風はまだ冷たいが、寒さは全く感じなかった。真由美に嫌われるならそれも仕方が無い。本当の自分を嫌われる方が、嘘の自分を好かれるよりましな筈だ。真由美を見るのは怖くて出来ない。

僕は立ち上がって、少し橋の方に歩いた。

思い切って振り向くと、まっすぐ見つめる真由美と目があった。

「私も……警察署について行っていいかな」

真由美の澄んだ眼がまっすぐに僕を見つめていた。

万代橋の中ほどで、僕らは立ち止まった。

二人でこの橋を渡るのは何回目だろうか。

二人で川を見下ろした。

相変わらずの曇り空。川の水もよんどんで灰色をしていた。

僕は手にもっていたレシーバーを思いっきり遠くへ投げ捨てた。

緩やかな放物線を描いて、受信機は川面に落ちていった。一瞬小さな白い飛まつが上がり、すぐに水面は静かになった。

「あ、あれ。証拠品じゃなかったの？」

真由美が慌てて言った。

「大丈夫、証拠品はこっちさ。あれは持ち歩いてた分だ」

僕が開いたバックの中には、いつも家で使っていたユピテルのマルチバンドレシーバーが収まっている。

これからこれを持って警察署に行くのだ。

傍観者はやめた。

失敗するかもしれないし、傷つく事があるかもしれないけど、せつかく生きてるんだから前に進まなきゃな。

友人を助けることは出来なかったけど、まだすべてが終わったわけじゃない。

再び二人で歩き出す。

春が近くなったおかげか、雲が切れて広い橋の上に明るい日がさした。

雪国の長い冬の後だからかな、それはやけにまぶしい日差しだった。

リスナー

終わり

